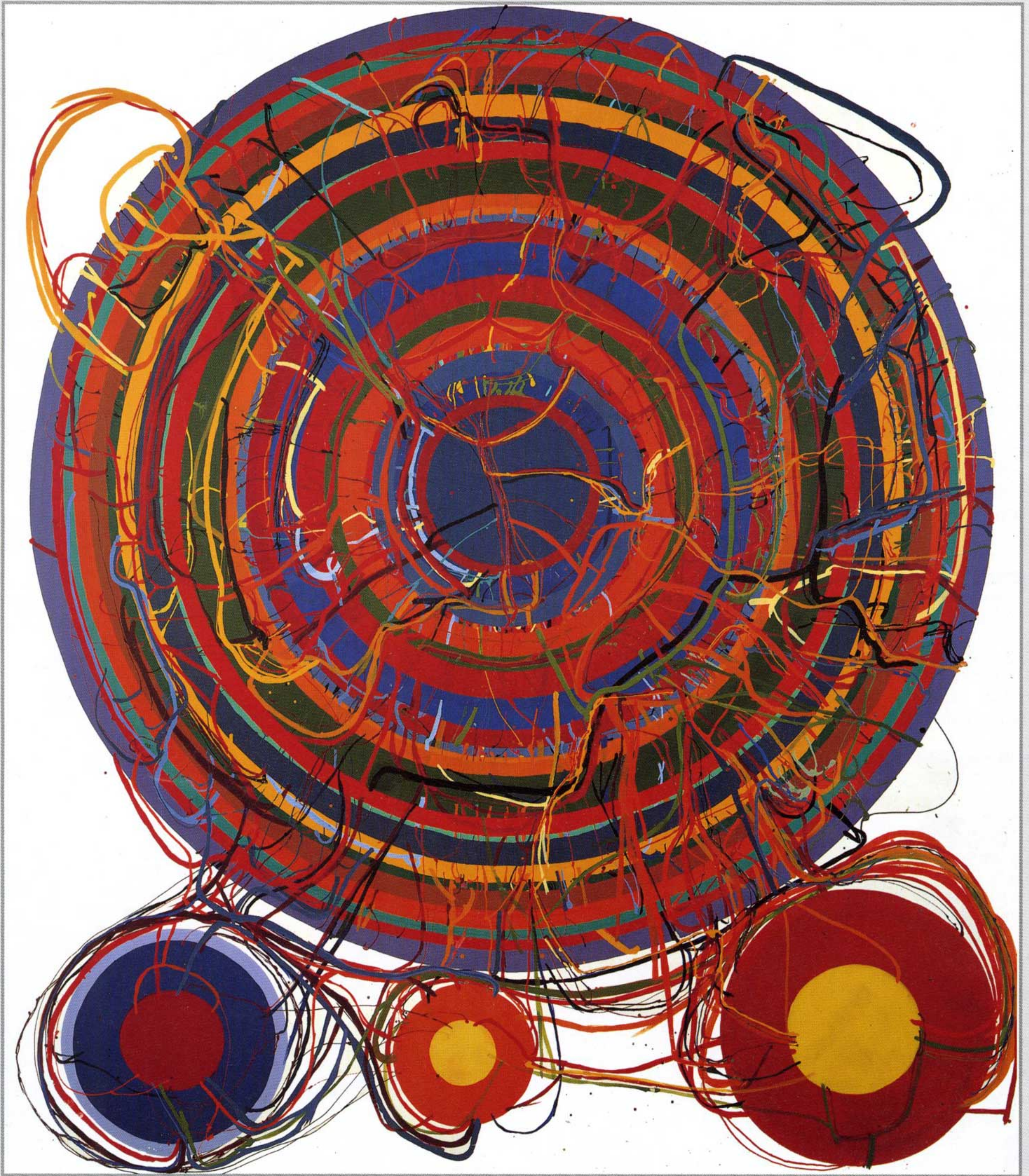


# 平成7・8年度新収蔵作品展(後期)

千葉市美術館所蔵作品展



◆田中敦子 Thanks Sam 1963年◆



千葉市美術館  
Chiba City Museum of Art

# 出品リスト

平成7・8年度新収蔵作品展の前期は、  
収集方針 1—千葉市を中心とした房総ゆかりの作家・作品と、  
収集方針 2—近世・近代の日本絵画と版画から、51点の作品を選び構成しました。  
後期は、  
収集方針 3—現代美術から選んだ31点を展示いたします。

凡例  
日本人作家と外国人作家別に分け、それぞれ作家生年順に配列しました。

作品名・制作年・技法・寸法（縦×横×奥行cm、原則としてイメージ・サイズ）・  
主な展覧会歴の順でデータを記載しました。

展示の都合上、出品作品に変更のある場合があります。

## ◆山口長男 1902～1983

1. 赤  
1971年  
油彩、板  
182.0×182.0cm  
第10回現代日本美術展（東京都美術館 1971） 山口長男・堀内正和展  
（東京国立近代美術館 1980） 山口長男展（北九州市立美術館 1980）

## ◆村井正誠 1905生

2. Crucifix  
1947年  
油彩、カンヴァス  
100.0×78.9cm  
第1回美術団体連合展（東京都美術館 1947） 村井正誠展（神奈川県立近代美術館 1995）

新造形主義の影響を強く感じさせる磔刑図。十字架を構成する四角形や、  
白地に原色を中心とした色使いなど、特にモンドリアンを想起させる。

## ◆堀内正和 1911年生

3. Exercise 2  
1956年  
鉄  
42.0×29.0×53.0cm  
第41回二科展（1956） 第4回サンパウロ・ビエンナーレ（1957）  
山口長男・堀内正和展（東京国立近代美術館 1980） 戦後文化の軌跡  
1945 - 1995（目黒区立美術館 1995）

## ◆白髪一雄 1924生

4. 天巧星小李廣  
1961年  
油彩、カンヴァス  
182.0×273.0cm  
個展（東京画廊 1962） 大光コレクション展（新潟県立近代美術館  
1993）  
作品タイトルには、この時期の他の作品と同じく、『水滸伝』の登場人物の  
名前が用いられている。

## ◆土谷 武 1926生

5. 門  
1964年  
木・鉄  
146.0×152.0×87.0cm  
第6回現代日本彫刻展（1964）

## ◆山口勝弘 1928生

6. 宇宙の運行  
1950年  
油彩、カンヴァス  
31.8×41.0cm  
個展（松島ギャラリー 1952）

## 7. 無題

1951年  
油彩、カンヴァス  
50.5×65.5cm  
1953年 ライトアップ（目黒区立美術館 1996）

## ◆草間彌生 1929生

8. 無限の網目  
1970年  
油彩、カンヴァス

153.0×138.0cm

1958年に制作が開始された〈無限の網目〉シリーズは、単色の地に均質  
な網目が描き込まれたものであるが、本作品は銀河のような模様が浮かび  
上がるように描かれている点で珍しい作例と言える。70年代の草間は、主  
に立体作品の制作や小説の執筆に没頭し、本格的なペインティングはほと  
んど制作していない。

## ◆田中敦子 1932生

9. Thanks Sam  
1963年  
ビニール系絵具、カンヴァス  
225.0×193.0cm  
個展（南画廊 1963） Guggenheim  
International Award 1964（Solomon R.  
Guggenheim Museum 1964）

"Sam"とはアメリカの画家サム・フランシスのことである。彼は1957年  
勅使河原蒼風の招きで初来日。一時期日本人と結婚していたこともあり、  
当時頻りに日本を訪れている。61年には南画廊で個展も開いており、その  
頃田中と交友があったらしい。

## ◆河原 温 1932生

10. 考える男  
1952年  
油彩、カンヴァス  
100.0×65.3cm  
第5回日本アンテバンダン（東京都美術館 1953） On Kawara 1952 -  
1956 Tokyo（Museum für Moderne Kunst, Frankfurt am Main 1994）  
1953年 ライトアップ（目黒区立美術館 1996）

## ◆中西夏之 1935生

11. 韻 '60  
1959～60年  
ペイント・エナメル・砂、合板  
112.5×145.5cm  
個展（櫛画廊 1960） 中西夏之展（東京都現代美術館 1997）

## 12. 韻 '60

1959～60年  
ペイント・エナメル・砂、合板  
112.5×145.5cm  
個展（櫛画廊 1960） 中西夏之展（東京都現代美術館 1997）

61年発表の「韻」という文章には、「無定形が存在である自己が消滅して  
ゆく刻々の過程を、平面を回復しながら記してゆき、なお、それ以上に意  
味としての芸術にまで高めてゆきたいと思う」と述べられている。作品タ  
イトルは、カールハインツ・シュトックハウゼンの電子音楽〈韻〉を、作  
者が耳にしたことから付けられたという。

## 13. オレンジと緑の間で III

1976年  
油彩、カンヴァス  
112.0×162.0cm  
個展（南画廊 1976）

## 14. オレンジと緑の間で VII

1976年  
油彩、カンヴァス  
112.0×162.0cm  
個展（南画廊 1976）

〈オレンジと緑の間で〉シリーズは、全部で7点制作された。60年代末か  
ら中西の作品において重要な位置を占めていた「正三角形」が、かすれつ  
つあるとはいえ、依然として画面の中央に置かれている。

## ◆菊畑茂久馬 1935生

15. 月宮 第十番  
1989年  
油彩・木・布、カンヴァス  
330.0×200.8cm  
第19回現代日本美術展—祝福された絵画（東京都美術館 1992）

16. 月宮 第十二番

1989年

油彩・木・布, カンヴァス

330.0×200.8cm

第19回現代日本美術展－祝福された絵画（東京都美術館 1992）

〈月宮〉シリーズは、〈天動説〉、〈月光〉に続く3番目の絵画シリーズで、12点制作された。

※第十番は平成6年度購入作品であるが、第十二番と組み合わせて展示するように意図されているため、特別に出品することとした。

◆若林 奮 1936生

17. 7.28－8.23 クロバエ上の変更

1969年

鉄・ポリエステル

130.0×88.0×185.0cm

第3回現代日本彫刻展（宇部市野外彫刻美術館 1969）

◆三木富雄 1938～1978

18. Ear

1974年

アルミニウム

65.0×43.2×25.0cm

三木富雄展（渋谷区立松濤美術館 1992）

多摩美術大学の東野ゼミに招待された際、「水」をテーマに制作された作品。アルミニウムの箱の中に置かれた耳がほぼ隠れる高さまで水を張るように意図されている。78年に急逝するまでつくられ続けた夥しい数の「耳」のなかでも異色の作品である。

◆向井修二 1939生

19. 作品

1962年頃

油彩・ミクストメディア, カンヴァス

184.0×184.0cm

1962年当時、トリノで国際芸術研究センターの所長を勤めていたミシェル・タピエが、イタリアに持ち帰った「具体」作品10点のうちの一つ。最近までタピエの遺族が所有していた。

◆立石絨一 1941生

20. 汝, 多くの他者たち

1964年

油彩, カンヴァス

112.0×162.0cm

アンデバンダン64（東京都美術館 1964）立石大河壺 1963 - 1993（田川市美術館 1994）

◆菅 木志雄 1944生

21. 外在向置

1994年

木

180.0×360.0×8.5cm / 129.0×26.0×16.0cm

個展（かねこ・あーとギャラリー 1994）

◆野村 仁 1945生

22. コスミック・センシビリティ1 Ancient Edged Tool

1992年

隕石・大理石

49.0×19.0×17.0cm

23. コスミック・センシビリティ2 Conception

1992年

隕石・大理石

45.5×17.0×20.0cm

24. コスミック・センシビリティ3 Resources in the 21st c.

1992年

隕石・大理石

45.5×17.0×20.0cm

◆吉永 裕 1948生

25. 5ST - 8AV

1990年

顔料, 紙

218.0×218.0cm

正方形の色面から構成される作品から支持体全面を単一の色彩で被う作品への移行期に制作された作品。チタニウム・シルバー・ジंक・胡粉の4種類の白色顔料で4区画が塗り分けられている。

◆小林正人 1959生

26. 飾絵

1985年

油彩, カンヴァス

160.0×200.0cm

個展（鎌倉画廊 1985）

27. 絵画の子

1989年

ペンキ・チョーク, カンヴァス

194.0×259.0cm

色相の詩学（川崎市民ミュージアム 1991）

◆ソル・ルウィット 1928生

Sol Le Witt

28. 不完全に開かれた立方体 6/20

Incomplete Open Cube 6/20

1974年

エナメル焼付塗装, アルミニウム

106.6×106.6×106.6cm

29. 不完全に開かれた立方体 7/16

Incomplete Open Cube 7/16

1974年

エナメル焼付塗装, アルミニウム

106.6×106.6×106.6cm

〈Incomplete Open Cube〉シリーズは、特定の辺を欠いた立方体のヴァリエーション全てを、辺の数に従って系列化するというプロジェクトである。互いに垂直な3辺という最小限の情報から、1辺のみを欠いた最大限の情報まで、ヴァリエーション数は122にのぼる。1974年、シリーズが最初に発表されたジョン・ウェーバー・ギャラリーの個展では、巨大な台の上の一辺8インチのモジュールが122個並ぶインスタレーションと、122のヴァリエーション全てを再現した写真とドローイングが展示された。またこの展覧会にあわせ、アーティスト・ブックも出版されている。さらにルウィットは、1辺を42インチに拡大したヴァージョンも制作しており、そのうちの2点が今回展示する作品である。

◆デニス・オッペンハイム 1938生

Dennis Oppenheim

30. 年輪

Annual Rings

1968年

写真・地図・コラージュ, ボード

203.0×457.0cm

〈Annual Rings〉は、1968年冬、メイン州北部で行われた一連の〈スノー・プロジェクト〉の一つである。アメリカとカナダの国境を流れる河川に分断されるかたちで、巨大な樹木の年輪がシャベルを用いて雪上に描かれた。この時期のオッペンハイムの作品のなかでは、ポリティカルな含意を前面に押し出した作品と言えるが、彼の作品の特質である一時的、仮設的な性質は、ここでも顕著にみられる。

◆プリンキー・パレルモ 1943年

Blinky Palermo

31. 4つのプロトタイプ

4 Prototypen

1970年

シルクスクリーン, プリストルボード

60.0×60.0cm 4点

出版元はミュンヘンのハイナー・フリードリッヒ画廊。

エディション数は90。



◆ 小林正人 飾絵 1985年



◆ 草間彌生 無限の網目 1970年



◆ 向井修二 作品 1962年頃

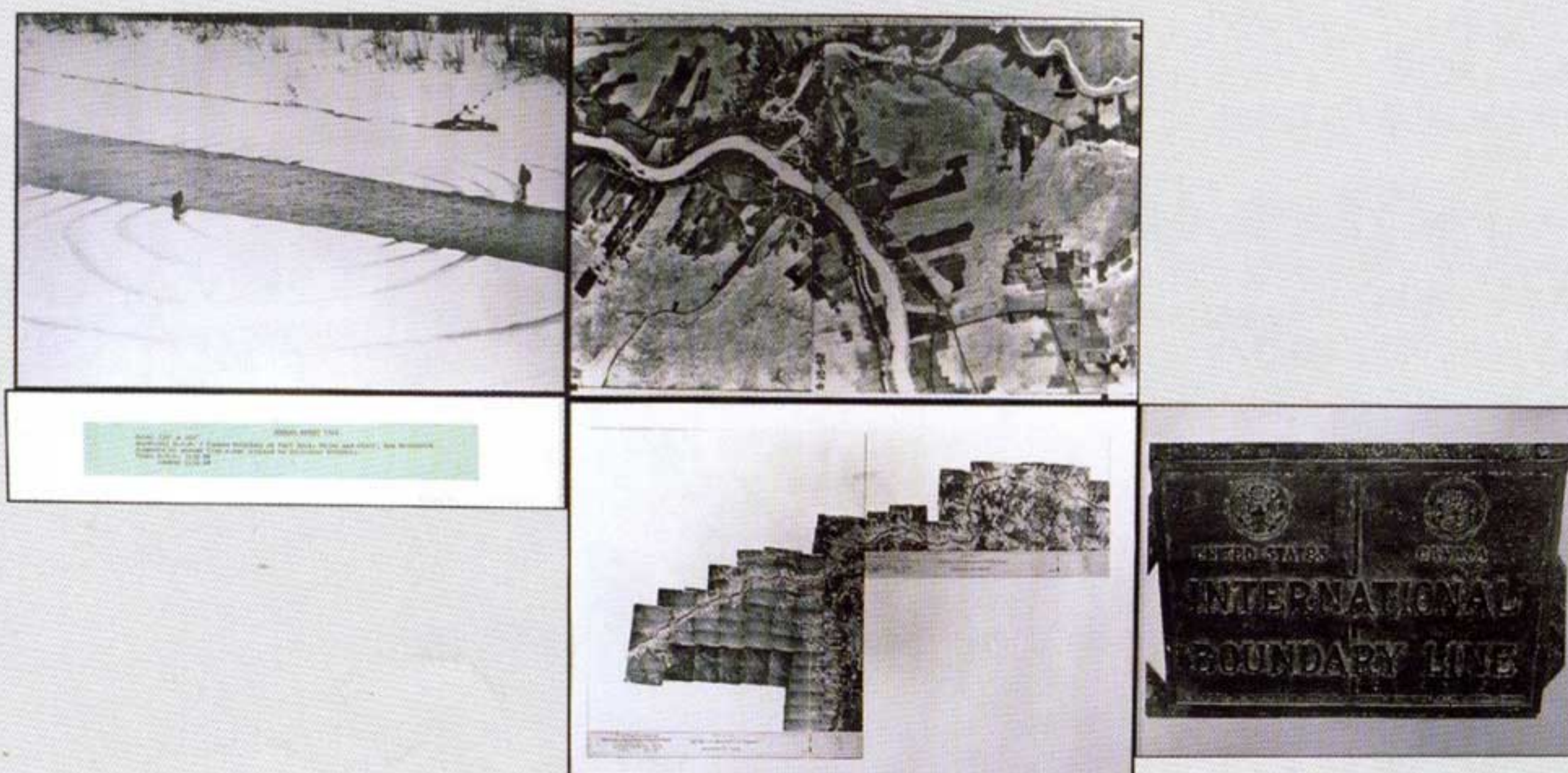


◆ 中西夏之 オレンジと緑の間で VII 1976年

千葉市美術館所蔵作品展  
平成7・8年度新収蔵作品展（後期）  
1997年4月10日発行

編集・発行 千葉市美術館  
撮影 内田芳孝（ノマディック工房）  
制作 (株)フレックス 坂本恒夫

会期 1997年4月10日～5月5日  
会場 7F展示室 6～8



◆ デニス・オッペンハイム 年輪 1968年